

大人の女性 2

ローリング・ビートル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

緑谷出久とマンダレイのほっこりするお話です。

目次

大人の女性2

1

大人の女性2

とある休日の午後。

プロヒーローチーム・プツシーキャッツのメンバーの一人であるマンダレイは、雄英高校に向かっていた。

その目的は、ヒーローの先輩として、とある卵の特訓に付き合うことになったからだ。その相手は最近出来た寮の近くにある林の中で、既に一人で特訓を始めている。

……相変わらず頑張ってるんだなあ。

初めて会った時は本当に子供に見えたんだけど。

最近会ったばかりなのに、そんな感慨深い思いを抱くほどに、彼女は『彼』の事を、親しく思っている。特に最近は、会う度にドキッとさせられることも……。

……いや、何を考えているのかしら。私は……

マンダレイは頭を振り、妄想を振り払う。そう、今日は先輩として、指導者として彼に会うのだから、しっかりしなければ……。

彼女は一人、気合いを入れ直した。

「確か、こっちだったわね」

出久から聞いた話を思い出しながら、マンダレイは少し早歩きに約束の場所に向かう。

待ち合わせ場所は、新しく建てられた学生寮付近の森だ。

さて、彼は何処にいるのだろうか？

「緑谷く〜ん」

辺りを見回していると、誰かが倒れているのが見えた。

「えっ？み、緑谷君!？」

それが誰だか気づいた彼女は慌てて駆け寄った。

彼を起こさないように頭を動かし、そっと膝枕をしてあげた。

すると、彼のあどけない笑顔に、つい頬が緩むのを自覚してしまう。

……なんか、この前見た時より凛々しくなってるかも

マンダレイはそっと自分の顔を出久の顔に近づけた……のだが。

「んん……んん？」

出久がいきなり目を覚ました。

「っ！」

その焦点の合っていない瞳に驚きはしたのだが、マンダレイは何故か動くことができない

かった。

「……………え？」

「……………」

至近距離で視線が絡み合い、物音一つ立てることもできない気まずい沈黙が生まれる。

しかし、それも数秒の事で、本格的に目が覚めた出久はあたふたと慌てだした。

「マ、マンダレイ!? な、何で!？」

「こんにちは、デクくん。あはは……………びっくりした?」

「そ、それはもう! ど、どうしたんですか、いきなり!？」

「いきなりっていうか……………約束通りの時間に來たら、君が疲れて倒れてたから……………ね?」

「……………あつ! そ、そうでした! す、すみません!」

予想外の出来事に、出久は慌てて起きようとしますが、マンダレイはそれを優しく押さえた。

「いいわよ。まだ休んでて。また無理してたんでしょ」

「は、はい……………すみません」

「ふふつ……………たまにはこういうのもいいかも」

「えっ?」

「なんでもないわ。それより、休憩終わったら、みつちりしごいてあげるから覚悟しててね」

「……はいっ」

出久はそのやわらかな大人の微笑みに胸を高鳴るのを感じた。
だが彼がその理由に気づくのは、もっと先の話である。

「お、おい、あれ……!」

「み、緑谷の奴う……!」